

會報



147 號

(1949-10)

日本山岳會

いわゆる訓練について

松方三郎

最近のことだが、英國の山岳會ではどんな訓練をやっているのか聞かせてくれないか、という注文をうけたことがある。質問がちょっと突飛なので、ぼくは思わず相手の顔を見つめたことだった。

この場合、訓練ということは、講習會を催したり、集團で登山をやつたりして、その間にリーダーが適當な指導をし、訓練を興えるごく普通の意味の訓練を意味しているのだが、大体の傾向として、この種の訓練は、あまり英國人のほだあい合わないのではないだろうか。アルパイン・クラブなどがある種の企画をたてたといつたことは、今日まで耳にしたことがない。ことにどつちかといえば、アルパイン・クラブなどは出来上つた山岳人を收容するところなのだから、いわゆる訓練などというものゝの必要を認めないのかも知れない。

しかしながら、こういつたからといってアルパイン・クラブの會

員はただ漫然とクラブ・ルームに集つて、パイプでもくわえながらのんびりと山の思い出話をやつているのだと思つたらば、それはとんだ感違ひをしたことになる。数次にわたるエヴェレストの例をあげるまでもなく、登山史上にエボクツクをつつた、幾つかの記念すべき登山なり探検なりは、やはりこのアルパイン・クラブの集會や圖書室の中から生れて來ているのだ。

さらに又、若い世代が大先輩、先輩の間にほおこまれて、感激したり、面食つたりしている間にどれ程の勉強をさせられ激勵を受けるか、そんな目に見えない面を考へ合せるならば、アルパイン・クラブといへども、確かに後輩の訓練を大いにやつているのだということになるかも知れない。

ことにアルパイン・クラブの場合の如き、クラブの中で厳格な秩序が大きな教育的効果を持つてあることは、何としても否定出來ない。小島さんの「風流使者」の中に三十五年前に日本山岳會の近藤、辻村兩會員が、アルパイン・クラブの月例午餐會に招かれたり集會で日本の山についての講演をやつたりする話が出てゐる。そしてその中に、アルパイン・クラブの會員がお互いにその名を呼びつけにしている、如何にも親しげに見える、ということが書いてある事實、あのクラブはクラブの會員は老若の區別なくお互いに呼びつけにしているようだ。もつとも如何にそれがクラブの習わしだとして、それが、新米の驅出しではまさかフレッシュファイルドのヤングハスバンドだなどと呼びつけには出來ない。

とにかく、會員同志になると、まるで兄弟のように親しくつきあうのである。又、ちよつと氣をつけてアルパイン・レジスターなどを見てみると誰は誰の妹婿に當るといつたような——もちろん一緒に山を歩いている間柄から結ばれた因せき關係なのだが——例を、極めて容易に目につけ出すことが出来るのである。アルパイン・ジャーナルの中の雜報欄(アルパイン・ノーツ)を見ても、會員誰の孫と會員誰の孫とが結婚したといつた

ば教育でないような考え方からすれば、訓練といへば、リーダーが決つていて一つの方式をもつてやるものだといふことになるし、こんな考え方は日本などでは、なかなか深く人々の頭の中に根をはつてゐるのだが、何もそう狭く考える必要もないとなれば、アルパイン・クラブなども、大いに後輩の訓練をやつてゐるのだといふことはいつてよいだろう。そして、こゝに一つ進んで考えれば、この方が本物の訓練だといつていえないことも

行事豫定

◆ 第113回小集會 ◆

10月20日(木) 午後5時

場所 山岳會 ルーム

◆ 第4回 國民體育大會記念 ◆

公開登山(自由参加)◆

10月30日—11月3日

金峰・瑞嶺山・甲斐駒・三ヶ峠

大菩薩峠

◆ 冬期スキー講習會 ◆

(東京支部計画)

明年 1月1日—5日

場所 岐阜縣坂上村スキー場

第一一四回小集會十一月十七日 第三水曜日 午後五時半

辻村太郎博士 「火山地形の話」

ような記事が時々出てゐる。

それでいながら、アルパイン・クラブ程先輩後輩の關係のやかましいところもない。といつても、それは先輩が後輩に何だ彼だといふやかましくいつたりする意味ではない。何となく、自然に、長幼の序がはつきり立つてゐるというだけのことなのである。ところが自然にそうなるのではなく、これはなかなか簡単に眞似が出来ない。教育という学校の建物がつて時間割で教えてもらわなければ

ない。

ただし、これは英國の話だ日本であれわれがこれをそのまま眞似していいという事にはならない。日本では日本の實際を土台に考へるべきは當然のことだし、日本の實際が英國の現實と相當に離れてゐることも事實だ。必要なら號令をかけて訓練する。これもそのやり方であり、その意圖である。

質からして、山登りが極めて一般的なりクリエーションにかけこんでしまふ可能性が強いだけに、黙つてゐると全くの地方的なものになつてしまふ。もちろんこのこと自体は、實は、必ずしも排撃すべきこともないし、ヒマラヤ、ヒマラヤといつて廻ることが偉いことでもないことはわかり切つたことだ。しかしながら與へられた環境が以上のやうなものである以上常にその水準を國際的な高さにあげようとする努力が、どこかで組織的に拂われてゐることは、日本の登山界にとつて大切なことだと思ふのである。傳統からいつても、地理的條件からいつても、日本の登山界が國際的な水準を維持していくといふことは、そう容易なことではない。一人々々の個人を取上げて見れば、日本人必ずしも劣るとは思われないのだが。

日本山岳會が一方にクラブとしての性格を保持しながら、これと併行して優れた山岳人を育ててゆくことに積極的な関心を持つてゐることは以上の理由からして當然のことだろう。いうまでもないことだが教育や訓練といふことは、往々にして、教育や訓練を施す側にとつての教育であり訓練である。この點も會は充分意識してゐるわけだ。そして、それを通して會自体も生長して行くことをひそかに期待してゐるのでもある。

『小島鳥水追憶』日本山岳會編「山岳」鳥水記念號と同じ内容ですが、紙質装訂を改めて、特製單行本の体裁をほどこしたものです。部數は百部の限定出版ですから、希望者は本會或は發行所の圖書院へ豫め御申込下さい。

國民体育大會登山について

一、沿革と主旨

第四回國民体育大會が今秋東京都を中心催され、その登山部門の行事が山梨縣の後援によつて富士山吉田口に於て實施されることとなつた。これについては既に新聞紙により會員各位のよく承知されて居るところと思ふ。本會が國体に參加するのはこれ三回目、(第一回國体が昭和廿一年秋京都市で行はれた時は本會は体協に加盟して居らず、登山協會が代つて參加したのである)然し此の間たとへば入場式の行列に加つたり選手とか競技とかプログラムとか云ふ様な気分の下で山に登ることは何か今迄我々が育つて來た登山社會の雰囲気や身に沁み込んでしまつてゐる登山者のセンスにはなじみ難いものがあつた。此の故を反映してか參加の方式もなかなか定らず、毎年變遷して今日に至つて居る。氣分的な面はともかくとして、山登りそのものが此の種の綜合的体育行事に參加して、その意義を果して行くには色々の困難や不都合のあることも了解されて行つた。

然し本會が明かに日本体育協會の會員であり、その忠實なる加盟國体であるが爲には、從來の此の様な消極的態度は良心的には許され難いところであつた。昨秋の九州大會終了以來、今後國体に對し如何なる態度を以つて臨む可きかについては熱心且慎重に論議された。その結果國体登山を本會の實踐的啓蒙指導面の中心行事として採り上げて行くとする積極的

方針が決定され、具体的方法としては別項の如きものが案出された次第である。体協側からは更に天皇杯の採點に參加することの可能性について諮問して來たが、之に對しては堀田理事や委員長とする委員會に於て審議し、その非なることを答申した。

第一回大會の講演と展覽會とを主としたものから、第二回の賢王山登山、第三回の代表者會議、展覽會、講演會及び久住山登山と云ふ多彩な行事等の種々な經驗を経て、今回の「相當に高度な技術を持たなくては參加出来ない登山の實踐」を主眼として、之に講習會の側面を與へ且技術の認定、講習等を行う方法が案出決定されたわけである。そして特に今回は此の本行事と併行して、公開自由參加の大衆的な登山と甲府市及び本會圖書室に於ける展覽會も行はれることになつて居る。

本案の決定に當つて最も懸念されたのは、順位判定、採點等は決して行はないのであるが、技術の認定、講習等を行おうとする爲、所謂競技、競走の觀念を參加者に與へ、それが爲徒に時間を争ひ、危険をも肩て技術以上の登攀を強行する様な傾向を生ぜしめないであらうかと云ふ點にあつた。然し事前によく主旨を徹底させることに依つて之を除くことが出来る筈であるし、此の様な點に缺陷のある登山は直ちに觀破されてむしろ低位の判定を與へることにより今後の戒めとすることも出来るように考へた。危険防止についても万全の策を講ずる心算である。實施の

結果或は若干の弊害を見出すことがあるかも知れない。然しそれ以上の成果を擧げ得るならば多少の弊害も亦致し方ないものと考えて居るのである。

更には國体に此の種の登山のみを採り入れること、登山自体の性格とに關しても議論の岐れるところであらうが之は又他日に譲りた。

二、實施方法

1 場所 富士山吉田口

2 日程 十月卅日 東京に於て入場式參加後中央線經中富士吉田町に到り宿泊、登山準備會を行う。

十月卅一日 午前八時淺間神社前にて開會式、午前九時登山開始、夕刻五合目に到着宿泊。

十一月一日 頂上往復。

十一月二日 豫備日。

十一月三日 五合目—小御岳—精進湖—(以下自動車)—河口湖—御坂峠—甲府山梨縣廳前にて閉會式。

3、登山實施要領

(イ) 各都府縣單位の登山隊を編成し(申込者一名の都府縣は合併し、主催者側よりリーダーを出し一隊を編成する)豫め申込んである左記コースを経て登頂する。

記

1、屏風尾根若くはそれ以西の地區を経て登頂する(最も困難)

2、吉田口大澤を直登する(中程度)

3、吉田口夏路より登頂する(最も容易)

(ロ) 監察員參拾名各コースに分派し危険防止、技術指導に努め

且技術認定講習の資料を集める(ハ) 荒天の際は監察員を隊員に加へ隊を合併改編し且つコースの變更を行なつて安全なる登頂に努める場合がある。

(ニ) 豫備日を活用出来る場合は豫め準備した教程により技術訓練の講習會を實施する。

4、參加者

(イ) 各府縣より代表者三名以内とし、年齢、性別は問わないが積雪期における實踐登攀能力を充分具備しているものでなくてはならない。定員約百名

(ロ) 申込者が定員を超過した場合選手數の振當は主催者が決定する。

(ハ) 定員に充たない時は補缺を繰り上げるが、その振當は主催者が決定する。

(ニ) 各都府縣別の參加決定者は十月十日迄に主催者より通知する。

5、申込(省略)

9、注意事項

(イ) 本行事の主眼とするところは高度な技術を以つてする登山の實踐であり、之に講習會的側面を加へ、參加者の將來の爲に

よき參考たらしめようとするものである。此の目的を最も効果あらしめる手段として技術の認定と講習を行うのであつて決して技術の認定の爲の認定、講習を行おうとするものではないことを明確に承知して參加されたい。

(ロ) 携行裝備は露営用具を除く冬季登山用裝備一切(但しスキーわかんちきを除き一隊一本のザイル必携の事)

(ハ) 食糧、細部は追つて連絡するが行動日二日の晝食用として

不凍食糧を携行す一事、(パン等で好い) 以下省略

三、將來の方針

來年以降の國体登山をどの様な方法で行ふ可きかについては、本會としても猶研究を要する問題であつて結論に到達して居らない點が多い。(イ) スキー・スケートと共に冬季大會の行事に參加(体協との諒解が必要である)すると云ふ考へ方と、(ロ) 秋季大會に參加しつゝ、高峻山岳を選んで行く考へ方(例へば富士、穂高・劍等に登山地を限つて了つて、此の範圍内で循環する)と、(ハ) 大會開

スキー講習會

東京支部・岐阜スキー聯盟
期日 一九五〇年一月—十五日
場所 高山線禰上村中心
講師 會員顧問孝行・松田芳男・村松謙の諸氏
費用 一四〇〇円(宿泊食料雜費)
交通費は各自支出(詳細次號)

催地地元に一任して、よしその登山内容が低調なもので、スポーツ登山として首肯しかねる場合があつても、一回毎にその地方地方の登山に對する關心を高め啓蒙して行くことに満足して行こうと云ふ考へ方とに分けられる。体協との折衝をも含め本會の之に對する根本的方針は決定して居らないのであるが、第五回大會(昭和廿五年)については地元の熱烈なる懇望とその準備の進捗狀況とを考慮して(ハ)案に依ることとなり鈴鹿山塊に於ける開催の決定を見た次第である。(本年度國体行事責任理事、谷口記)

會務記事

役員會

七月十三日 連絡理事會

△國体山岳行幸としての初冬の富士登山が、山梨縣主催と決定していたのを、後援と變更することに就て、本日受諾の來電があつた。早急に準備委員會と事務局を決めることになった。

△對山岳連盟問題討議

七月二十日 役員總會
△山岳連盟問題に關し、その經過と本會の方向について、松方理事長から説明があり、次で各支部から本件に就ての問合に對し、理事長が回答案を起草(全文略)した。尙、今後岳連關係は、望月理事が擔當に決定。

△山梨縣廳へ出張した谷口・林兩理事から、同縣に於て豫算支出の見通しがついた旨、報告があつた。

△國体山岳部門富士山の本行事と平行して、三峰・大菩薩・金峰瑞麟・甲斐駒の四山行を、山梨縣主催の公開行事とすることに對し、全面的協力に決定。

△第五回國体の登山行事は、三重縣下、鈴鹿山塊に決定。

△第五回以降、對國体本會の方向に就て慎重に協議した(二頁参照)。

七月廿七日 連絡理事會

第五回以降の國体問題と關聯し、會の方向を討議(二頁参照)。

八月十七日 連絡理事會

山梨縣杉原觀光課長來會、全國行事富士登山及公開登山の問題決定討議。

△會員吉凶の際の會としての措置、會報内容に就ての檢討があつた。

八月廿四日 役員總會

△國体の經過に就て、谷口理事から報告があつた。

縣と本會との合成による準備委員會、その下に同様組織の事務局が設置されることになった。

△會報が一四六號を以て、八頁に増頁を強行したこと、今後更に必要により一二頁乃至それ以上にでも増強することも可能である見通しがついたため、編集方針に就て慎重に協議が行われ、左の結論を得た。

會には、いうまでもなく、機關誌「山岳」、雜誌「山」、それに會報の三つがあるが、「山」が大體、高校生級を讀者層の基礎とする(四頁閣下理事會表)に對し、會報は會務の報道機關であり、同時に會の理想とか方向とかを反映し、一口に云えば昔のようになふんいきを盛り、且つ會員全體に呼びかけるべき信頼と興趣をも兼ねた廣い面をもたせるものになよう、と。

九月七日 連絡理事會
國体問題の全面的討議

九月十四日 役員總會
いよいよ國体も餘すところ一月餘となつたので、具体的事項に就て熱心活潑に討議した。

七月廿六日 役員出張
谷口・千谷・崎田・原四名は吉田町の富士山麓電鉄に至り五合目に建設する冬期用小屋の問題につき研究協議。

八月五十一日 支部用務協議、山の講演と映画の會國体問題などの爲、原主事、米子市山陰支部へ出張。

八月八日 谷口・千谷、富士山五合目の現場で縣觀光課長、山麓電鉄社員と立會、小屋建設位置決定

九月六日 原、山梨支部今井理事長と縣觀光課に至り、宣傳用ポスター、公開行事の件協議

九月十五日 谷口・藤井・關根各理事、山梨縣へ出張、國体の具體的協議、豫算問題審議。

今年度の「山岳」
第四四一號・二號の山岳の內容については既に會報前號で發表し豫約購讀について會員各位にお願いを致しておきました所、新舊の會員から大分豫約をいただき、編集委員も喜んでをります。併し豫定の部数とはまだ相當距りがありますので、未だ御申込のない方はこの際是非二號分の豫約をされ會誌發行の事へに御協力下さる様重ねて御願ひ致します。

豫約申込金 三〇〇円
送金先 本會事務所宛
尙第一號(小島鳥水記念號)は本會報發行の頃には出來上る豫定です。

第四回國體公開登山
一 甲斐駒
A 黒戸山口 一〇〇名
第一日(十一月一日) 五時二分
日野春着(トラック)→菅原(朝食)→竹宇前宮→笹平→黒戸山→屏風小屋→七丈小屋、泊

第二日(十一月二日) 七丈→駒ガ岳→摩利支天→屏風→竹宇→菅原(トラック)→日野春→甲府泊
費用概算 一二五〇円

B 尾白谷口 五十名
第一日(十一月一日)
竹宇(A参照)→不動瀧→養老瀧→千丈瀧下→屏風小屋泊

第二日(十一月二日) Aの第二と大體同じ甲府泊
費用概算 Aに同じ

C 鞍掛澤口 五〇名
第一日(十月卅一日) Bに同じ
第二日(十一月一日) 屏風→駒一六合小屋→三ツ頭→烏帽子岳→鞍掛小屋、泊

第三日(十一月二日) 鞍掛→尾白下(以下Aに同じ)→甲府泊
費用概算 一三五〇円

二 金峰山・瑞瀧山 五〇名
A 金峰山昇仙峽口 五〇名
第一日(十月卅一日) 三時四十分甲府着(バス)→天神森→昇仙峽經由仙峨瀧→バノラマ台→金櫻神社→猫坂→上黒平、泊

第二日(十一月一日) 上黒平→水晶峠→金峰山→大日小屋→金山→ラヂウム泊
第三日(十一月二日) ラヂウム→比志(バス)→韭崎
費用概算 一六〇〇円

B 金峰山木賊峠口 五〇名
第一日(十月卅一日) 東京→淺川→韭崎→比志→ラヂウム泊
第二日(十一月一日) ラヂウム→金山→富士見平→金山→水晶峠→上黒平泊

第三日(十一月二日) 上黒平→猫坂→金櫻神社→天神森→甲府泊
費用概算 一六〇〇円

C 瑞瀧山 一〇〇名
第一日(十一月一日) ラヂウム泊(Bに同じ)
第二日(十一月二日) ラヂウム→黒森→瑞瀧山→富士見平→金山→木賊峠→御岳泊

第三日(十一月三日) 御岳→昇仙峽→甲府泊
費用概算 一六五〇円

三 大菩薩峠 二〇〇名
第一日(十一月一日) 鹽山→米田屋→雲峯寺→上日川峠→勝縁莊→菩薩峠→頂上→唐松尾根→上日川峠→鹽山泊

第二日(十一月二日) 菅田神社→勝縁莊→岩崎→甲府
費用概算 一四五〇円

四 三峰山 二五〇名
A 三峰峠口
第一日(十一月一日) 新宿→大月→三峰峠→ダルマ石→八十八大師→三峰山→母ノ白瀧→河口村→淺間社→河口泊

第二日(十一月二日) 淺間社→紅蓮台→等進湖→富士吉田→大月→新宿
費用概算 九〇〇円

B 河口村口 四〇〇名
新宿→富士吉田→河口淺間社→母ノ白瀧→三峰山→新倉山→淺川→津澤泊
第二日(十一月二日) Aと同じ

費用概算 九〇〇円
C 御坂口 三五〇名
第一日(十一月一日) 富士吉田→御坂峠口→三峰山→八十八大師→ダルマ石→三峰峠→吉田泊

第二日(十一月二日) 富士淺間社→旭ヶ丘→富士吉田
費用概算 九〇〇円

注意 一、甲斐駒、金峯は夏山の經驗ある健脚者向。瑞瀧、大菩薩は稍高度のハイカー向、三峰は一般向、殊にC班は老人・子供にも參加できる。二、甲斐駒各班は毛布又は寝袋を要し、炊事は地元菅原山岳會が奉仕するので、主食・中食用副食持参のこと。

申込 申込金五百円(一部は東京よりの汽車賃に充當)を添え、十月十五日迄に、日本山岳會又は山梨縣觀光課内國体事務局宛

圖書紹介

スウイス日記

辻村伊助著
思案社 一九四九年八月刊
内容 序 スウイス日記 續スウイス日記 著者略歴

多くの人は我國の人によつて書かれた山についての書物のうち特に優れたものを選ぶ場合、まず此の書をもつてあげることと書ふ。事實、山好きの人々は此の書愛蔵し、時がたつても、時々取出して讀みその處々をそらんじている人さへある。又今度の戦争によつてこの書を失つた人々は再び求めやうと努力をする。ここに、「此の書」といふのは昭和五年刊の梓書房版をいふのであるが、絶版となつて今は求めることはむづかしい。今度、思案社から梓書房版の本文内容をそのままリプリントして刊行した。人々はこれによつて、あの美しい「日記」に接することが出来る。今度の「スウイス日記」は梓書房版にある「追憶」武田久吉「純情の人、伊助」高野藤藏「附「スウイス日記」發掘の始末」附「スウイス日記」の由來「小島島水」を缺き、新たに「著者略歴」を添え、「スウイス略圖」が全く別のものであり、三十枚の寫眞を六枚にし、菊判がB6版となつた。

人の解題があつた方がよかつたと思ふ。「著者略歴」も筆者を明らかにしてゐない。「解題」は新しいこの書を読む人を助け、又梓書房版が武田、高野、小島諸氏の友情を添へて一そう美しいものとなつてゐるからである。「スウイス日記」は、小島氏の「スウイス日記の由來」にある通り「山岳」第十一年一號（一九一五年九月）から續いて掲載されたものであり一九二二年に紅玉堂書店より單行本（菊版本文二六八頁）として刊行、更に梓書房より完本として刊行されたものである。

今度の本は刊行を急いだのであろうか。このやうな書物をリプリントするには、多少し心使ひがあつたらしく惜しく思う。装幀は梓書房版の體裁をそのまま用いてゐるがB6版としては適はしくないと思う。箱の體裁もわづらわしい感じである。（田邊主計）

穂高岳 登攀ルート圖集

諏訪多榮藏著
朋文堂 一九四六年六月刊
菊判一六〇頁

筆者はこの書物の紹介というよりも、一人でも多くの人に讀んで貰いたいという推薦の言葉を雑誌「山」に書いた。然し乍ら會員だけの會報となると、腹の中のことをぶちまけたい氣がする。

この書物の中に、私が直接関係した行動もいくつか載つてゐるが大部分は誤を含んでゐる。私が關係したところ、三の先輩に質して見たところ、やはり引用が杜撰であるとか、全部を讀んでないで引用したのではないのかという具合で、そこに引用された数多くの登攀例というものは、殆んど全部があやしいものはないかと思わざるを得なくなつたのである。

一ヶ月も費して成功した行動も半日であつてなく退却した山行も全で一途に二三行で取扱うこと自体も大變おかしいけれども、引用するには、第一にその記録された行動をよく理解しなければならぬ。

私は穂高という山を好んだ。今も大變好きである。好きだといふばかりでなく、日本の山の中で、幾分でも技術といふことを念頭におくならば、最後のよりどころは穂高と富士山以外にはなからうとさえ思つてゐる。この大切な穂高岳に關して、一つの「便覧」を日本登山界が持つことも、眞に喜ばしいことだと考える。

だから諏訪多氏の勞多きこの著作は、その目標は極めてよかつたのである。唯出來上つたものが、その勢に値する程正しいものではなかつた。

私はこの際、ここに引用されてゐる大部分の行動に、會員が参加してゐるのではないかと思うから會員が積極的にこのルート圖集を改訂してみたらどうであらうか。引用してゐる登攀例ばかりでなく中心となるべき、所謂ルート圖なるものも兒戯に類するものではあつても、若い高校生などはヤソ教徒が聖書を讀くように、扱うかも知れないのである。こうなると直接生命の問題にもなり兼ねないから小さな問題ではない。（関根吉郎）

雑誌「山」について

戦後「會報」が唯會員通信だけの役をしてゐたのでは紙の配給が受けられなくなつて、雑誌として一本立をしなければならなくなつた。「山」といふ名を付けて幾號かを世に送つたことは會としても一つの慰めであつた。

先ず會員自身でやり始め、次いで交通公社、河出書房と轉々とその發賣所を變えていつたが、亦々變向せざるを得なくなつてしまつた。河出書房が相當の意氣込みで、「山岳」及「山」を引受けたのはまだ昨年の夏のことであつた。「山岳」の方は一號を出しただけであつたが「山」は八號を出し、遂に順調に發展していつたのは、河出書房の力の入れ方が大きかつたことを證するものである。

然し乍ら昨年秋頃からの出版界の情勢は、門外漢の推察などよりは餘程きびしいものであつたらしく、さすがの河出書房も社内の態勢をととのえ直す必要に直面した。發行部数一萬以下の「山」は整理の對象となつてしまつた。

戦後僅か二三年の間に「山」の通つた迂曲の道は長かつた。亦編集者の感じた面もそれに相當して複雑なものとなつた。

これらの結果を綜合して、今後の「山」の方針を結論として述べてみる。

一旦世に出したからといって、出す意味がないなら出版する必要は毛頭ない。會は傳統ある機關誌として「山岳」をもつてゐる。「山岳」に對する會の態度は戦前、戦時中、戦後不變といつてよい。一時紙の都合が付かなかつた、

「會報」も漸く紙の入手も可能になり次第に昔日の面影を回復出来るように見える。

このような情勢に於て「山」を別に持つ必要は、山岳會の戦後の一動向である、より廣く大衆にという方向に向つて残された道を進むことではあるまいか。

既に交通公社の時代からそのつもりでゐたのであるが、こゝに至つて編集者一同は堅くこの意味の必要を痛感した。我が國に於ては大家に愛されることは即ちサロンに於て懇口をあひせられ、最ことを意味する。會のルームで最

乗鞍スキー登山

東京支部・飛騨山岳會
期日 一九五〇年一月六―十日
(スキー講習後に引續き)

行程 高山―旗針―平湯峠―猫ノ小屋泊―乗鞍山頂

係 原全教・中里隆介・飛騨山岳會有志

費用 未定
裝備 スキー一式・アザラシ・金カンデキ

備考 乗鞍登山に次で、笠か抜戸槍え行くかもしれませんが(詳細は會報次號)

近の山が數々の口から罵られてゐるの聞き、この調子なら見込みがあるとはよく笑んでゐるのは四人の編集委員だけであらう。

このよふな意味の下に「山」は最近朋文堂に移つた。然る人新島氏の下で「山」は亦別の育ち方をすることも知れない。然し、新制高校などの廣い地盤に立つたところの方針は會の一つの明瞭な方針なのであり、その實現の程を長い眼を以つて見守つて頂きたいと同時に、變らぬ御援助も切にお願いする次第である。(関根吉郎)

図書室に関する報告

圖書室が竣工して既に半歳を経過した。快適な環境に加えて交通の便もよいので、都内近郊の會員地方會員の來室も日を逐うて増加しつつあるが、都内の會員数だけを考えてもまだまだ利用者は少いと言ひ得るであらう。圖書の充實整理が進んで、ライブラリーとしての機能を發揮するまでには尙相當の時日を要する。それまではクラブルームとして大いに利用されてよいとおもう。

建設費の支拂も完了したので資金募集係も一安心というところであるが、圖書の購入（現在まではアルバイン・ジャーナル全巻揃を買入れたに止る）や雑誌の製本等に今後資金を要する面は少くない。會員諸兄から資金、書籍雑誌等の寄贈を切望してやまない。

寄附者芳名（第四回報告）

二百円 牛山 大六 玉置誠一 三
百円 澤信 四百五十円 神谷眞
吾 一千円 吉村健兒 沼井鐵太
郎 二千円 深田久彌 三千円
日本山岳會大山支部及大山山岳會
小計 八、一五〇円
累計 六七〇、〇二五円

繪画器具寄贈者

大テール 谷口現吉 晴雨計
福井正吉 油繪 故高橋文太郎
木村鐵吉 タタミ八枚 商工省山
岳部 書棚扉 武村市太郎 扉硝
子 三菱化成旅行部 桎時計 中
尾正武 ヒマラヤ地圖 田邊主計
台秤 原全教 回轉椅子、整理箱
二 神谷恭

圖書室より

多くの人々の厚情と盡力とによる圖書室の落成は正に無から有を生じたやうな感じがしました。中におさまる圖書類も虎の門にて全部を焼かれてしまった「無」の状態から追々形を整えて来ることは誠にうれしいことです。

これらの圖書を特に御割愛下さった、現在までの寄附者の御名前と圖書名とを順次掲載してその御芳情に對し厚く御禮を申し上げます。御らんの通り、まだ圖書の整備は、はじまつたばかりです。更に多くの圖書の御寄贈を受け早く充實した圖書室に致したいと存じます。現在、會の財政の樂でないことは御承知の通りで、圖書の購入等も甚だ困難です。専ら皆様に御ねがい申上げる次第です。それにしても、これ等の書籍や資料を今後多年に亘り完全に保存して、會員の御役に立てたいのであります。その保管については特に責任の重いことを感じます。

まだ書棚の整理や目録の作成等が済んでおりませんが、やがて、御らんにやうやうにして、皆さんの御來室を御まち致します。最近、書棚にこれも寄贈のガラス戸の取付けを終り一段と整った感じが致しました。（田邊）

小集會

一〇九回 五月十九日（木）午後六時 於圖書室
會員辻莊一氏の「山の音楽」なる講演があり、氏は岳人の愛好する音楽及び山野や自然を取扱つた音楽について、獨特の解繹の下に

極めて有意義な話をされ續いてヴァンサン・ダンディー「アルプスの山人の歌」及びオネガーの一曲をレコードを通して觀賞した。

少憩後別宮貞俊氏の滯歐作品であるスイス・アルプスの原色版映画を映寫、アラバンドや田口氏等が画中の人物で、グリーンデルワルドを中心とした山々の極めて美しいフィルムであつた。十時散會。出席者會員三名、他二名
一〇〇回 六月二十三日（木）午後六時 於圖書室

武田會長が旅行中の爲、豫報したお話を伺うことができないのが残念だったが、隠れた高山植物研究家である會員伊藤準氏を煩わしてお話願つたところ、まず英彦山の石楠から始まつて、微に入り細を穿ち、次から次へと展開してつくる所を知らなかつた。

次に、日大山岳部によつて、十六ミリ映画数巻が試寫された。三峠岩登り、丹澤の懇親會など盛澤山なプログラムで、就中、飯登攀潤澤合宿など同山岳部の面目躍如たるものがあつた。

最後に六月に催されたウェストン祭山行班の行動について千谷、原兩氏の報告があつた。出席者會員四名、他八名
一一回 七月二十一日（木）午後六時半 於圖書室

古くから本會と深い關係をもたれた藤原咲博博士に「雲の話」と題して講演を願つた。博士は山に現われる種々な雲について平易な説明を以て興味深く説かれた後、諏訪湖の結氷の時期と太陽黒點の關係、及び太陽黒點と寒冷な夏の溫暖する冬の過期的な到來などについて昔から諏訪神社に保存されてきた記録に基く圖表を掲示さ

れ、有益な説明を加えられた。博士の説明に従えば、或る湖水の結氷の時期について、この様に古い時代から記録が残っているのは外國にもその例をみないとのこと。續いて來會者數氏の熱心な質問あり、最後に藤島、望月理事から會からの報告などがあつて九時半閉會した。來會者會員五三名、他四名

茨木さんの油繪

この度最近物故された會員高橋文太郎氏の御遺族から茨木猪之吉画伯の遺作（油絵一〇號）一點がルームへ贈られた。初冬の抜けるやうな青い空を背にした兩神山を描いたものでまさやかに區切られた稜線の面白味や黄に樺に色どられた秋深い山肌と僅かに見られる青木の對照が捨てがたい。永い年月を山と取り組んだ画伯晩年の佳品である。われわれは高橋家の御厚意に謝すると共に、亡き茨木、高橋兩氏の思ひ出に資したい。この一點も、これまで會に贈られた絵画や寫眞に加えてルールの壁面を飾ることとなつたが、書籍棚の多い圖書室は既に狹隘をつけつつあり、佐藤久一朗氏苦心の補修になつたウェストン師のレリーフなどと共にスペースの選定に嬉しい苦心をしている。

會計係から

前號貴重な紙面を割いて會費納入のお願いと、樂屋話をくどくどと申上げて、お聞き苦しいことだらけで誠に申譯なく存じますが、皆様の絶大な御協力により、このところ、會の台所もだいぶ明るくなりました。あと一きといふところですので、今一段の御協力を切望いたします。平業ちよいちよい

運動具全搬

登山用品取揃

南運動具店

小川町通中央角

千代田區小川町三ノ一
電話神田(25)一三五三

創業 30 年

登山靴
スキー靴

御調製・修理

クレツテルシュー

東京都新宿區(四ツ谷區内)三榮町 3

山友社

高橋靴店

おいでになつていて、案外まだ方がありますが、ぜひ至急お持ち下さいませ。

支 部 記 事

富山より

支部で小屋を
今度富山警務署の厚意により
空室の警務署の小屋を支部に譲り
受けることになつて、近く手紙の
上正式に發表監視する筈である
なお松ノ平温泉、大郎平小舎等番
人さへ決定すればこれも全部譲り
受ける内諾になつてゐる。池ノ平
スゴ乗越は支部の交渉によつて、
前者は魚津高校、後者は南部高校
（山）五月號既報が管理すること
になつた。右使用の方は必ず返
信料添え富山支部へお問合のこと
八 郡 坂

岩 登 講 習

八月十一日より剣南稜アレイト
にて岩登りの講習會舉行、女流ク
ライマーも之に参加、地元にも岩
をやる女性の出て來たのが頼もし
い限りであつた。
避難對策委員會

西岡の國體縣代表者大會に

山縣の山岳界現況報告の際援助
方懇請した、避難對策委員會（詳細
省略）は從來の民間團體に、（山）
五月號既報）今回縣、國體、及管
林署も之に参画更に強化されいよ
り發定的な機關として六月七日よ
り發足した。この實施により各方
面と緊密な連絡の下に縣内登山者
一般及連盟所屬會員の避難防止は
素より救援に關する高度な機動力
（鳩部隊の参加により）が發揮推
進される事が豫想される。

山の展覧會

縣民体育大會（縣と支部共催）は
八月下旬に行われるが、高岡市で
は山の展覧會、地獄谷（二泊）に
ては連絡會をやる豫定である。
指導標建設
立山方面の指導標確立のため今
回サロメチール本舗の後援を得て
一尺五寸×五寸の横板にて二百二十
枚作り、昨年支部が建立したより
奥部及バンバ島、劍西側方面を目
標にして、色は赤黄などを使用し
た美しいもので立木等に打ちつけ
る。この地域のルートは冬でもほ
つきりして登山者に喜ばれる事であ
らう。（報告者、富山支部常任
委員沼倉寛二郎）

山の放送

山開きに先立ちJ O I G から青
年の時間に「山へ登る人のため」と
題して、支部若林氏とアナ氏に
より十五分間の放送放送を行い、
多大の感銘を與えた。

山の案内所

今年も市内に「山の案内所」を
設け（専屬一名これに當る）初歩
の方から喜ばれて、押すなぐの
盛況で成果は大いに擧つた。

登山講習

第四回縣立山登山指導講習會
（共催）自七月八日至七月十二日
A班立山、B班は立山・劍・池ノ
平・黒部各々参加計册名、技術指
導に支部より数名講師として派遣
天候に恵まれ内容よく成果は大

山 陰 より

伯耆の國、大山は、獨り山陰の
みならず、中國地方を代表する最
高の名山である、といふことは天
下周知の事實である。
会報前號に發表された通り、地
元である米子を中心を置く山陰支
部（大山山岳會）は外面的には大
山の宣傳觀光、内面的には大山の
徹底的研究と施設完成に努力して
いる。左に今夏行事の主なものを
報告する。

講演と映画の夕

八月七日 招請により前日夕刻
着の本部原主事、本日來米の西村
縣体育課長を交え、佐野會長、港
副會長外會員十名、バスで大山寺
里へ到着、午後蒙山に登山し、
大山火口壁を仰望、次、鐵道省山
ノ家を視察、寂靜寺山、金門の勝
大山寺、洞明院を過ぎ、國寶阿彌
陀堂に参詣した。

同夜、博勢座スキー場で山の映

画會を催した。原主事持参の交通
公社提供「雪に描く」日大山岳部
の「劍・湖澤」上原總一郎氏作品
「新雪の穂高」などで、大山滞在
者約二百名來會して非常な好評で
あつた。

八月十日 正午、米子市長室で

原主事を圍み、正副會長、報道人
側では島根・中國・日本海・毎日
朝日・山陰日々その他座談會を
催し、國體に於ける登山の意義・
性格等の説明を求め、國體登山に
於ける大山の地位、適否につき忌
憚なき意見を聴取し、大山が國體
に有望であるとの結論を得た。

八月十日、午後八時から、明道

小學校で開催、
講演は約一時間、原主事が三十
餘年前山陰行脚の思出、大山の印

象、日本登山の方向、戦後派的登
山の批判、國體登山の意義などに
就て語り次で映画に移り十時半散
會、來賓者二百名盛會であつた。
大山觀覽山行

八月八日 原主事、縣体育課員

森氏を交え、湯崎大山寺出發、彌
山・劍が峰・三鈴峯を縦走して寶
珠居根より下山、大神山神社へ参
拜した。

八月九日 原主事、佐野會長、

港副會長少壯會員の組合せて各四
班を編成し、北壁の代表ルートを
とつて集中登山を行い、砂滑りか
ら下山した。

地獄谷合宿その他

會長以下十五名、大山東面の地
獄谷上流に合宿し、各小澤及東壁
に放射狀登攀を試みた。

ついで來入の廣島山岳會の人々

と協力、北壁の數ルートを登攀し
た。
そして今夏は毎週、北壁を中心
として全會員が万べんなく登つて
いる。

國體参加豫定

今秋舉行の策四回國體に於ける
富士登山及公開登山には、會長以
下約十五名が参加する豫定。（報
告者大山山岳會及山陰支部）

☆山の映画の夕☆

（第一二三回小集會）

期日 十月廿日（第三木曜）

場所 圖書室

會員 酒井菊雄氏作品

一、味覺と視覺の旅

二、秋の甲斐風土記二篇

三、劍岳生活

一、夏山の記録

三、志賀高原へ

自然なスキー

の汝の『外』
きである平明にすぐで
難ぶべきを、たは一本を
達し、界を、たは一本を
易く、界を、たは一本を
一入を、界を、たは一本を
名を、界を、たは一本を
今を、界を、たは一本を
後を、界を、たは一本を
技を、界を、たは一本を
役を、界を、たは一本を
全日本スキー連盟
指導員日本山岳會員岡孝行著
B6版 218頁 價 160円 千代田區
神田淡路町1—4 小笠原書房

アイスマンシツプ

堅 牢 優 美 信 念
アイゼン（刻印御注意）
其他登山用具全數 小林伊三郎
「廣告」南町三ノ五九六九
東京都練馬區練馬
小笠原書房

旅 情 小 さ き 峠

河 田 楨 著

山を對象とする旅人の好著
（日本圖書館協會選定圖書）
¥ 180.00 （山岳會圖書室
にあり）

東京都千代田區神田保町一の七
十字屋書店

番號		新入會員		氏名		住所	
三〇九五	濱上忠三	三〇九六	丸山彰	三〇九七	福原喜代男	三〇九八	三〇九九
三〇九六	三〇九七	三〇九八	三〇九九	三〇一〇	三〇一一	三〇一二	三〇一三
三〇一〇	三〇一一	三〇一二	三〇一三	三〇一四	三〇一五	三〇一六	三〇一七
三〇一四	三〇一五	三〇一六	三〇一七	三〇一八	三〇一九	三〇二〇	三〇二一
三〇一八	三〇一九	三〇二〇	三〇二一	三〇二二	三〇二三	三〇二四	三〇二五
三〇二二	三〇二三	三〇二四	三〇二五	三〇二六	三〇二七	三〇二八	三〇二九
三〇二六	三〇二七	三〇二八	三〇二九	三〇三〇	三〇三一	三〇三二	三〇三三
三〇三〇	三〇三一	三〇三二	三〇三三	三〇三四	三〇三五	三〇三六	三〇三七
三〇三四	三〇三五	三〇三六	三〇三七	三〇三八	三〇三九	三〇四〇	三〇四一
三〇三八	三〇三九	三〇四〇	三〇四一	三〇四二	三〇四三	三〇四四	三〇四五
三〇四二	三〇四三	三〇四四	三〇四五	三〇四六	三〇四七	三〇四八	三〇四九
三〇四六	三〇四七	三〇四八	三〇四九	三〇五〇	三〇五一	三〇五二	三〇五三
三〇五〇	三〇五一	三〇五二	三〇五三	三〇五四	三〇五五	三〇五六	三〇五七
三〇五四	三〇五五	三〇五六	三〇五七	三〇五八	三〇五九	三〇六〇	三〇六一
三〇五八	三〇五九	三〇六〇	三〇六一	三〇六二	三〇六三	三〇六四	三〇六五
三〇六二	三〇六三	三〇六四	三〇六五	三〇六六	三〇六七	三〇六八	三〇六九
三〇六六	三〇六七	三〇六八	三〇六九	三〇七〇	三〇七一	三〇七二	三〇七三
三〇七〇	三〇七一	三〇七二	三〇七三	三〇七四	三〇七五	三〇七六	三〇七七
三〇七四	三〇七五	三〇七六	三〇七七	三〇七八	三〇七九	三〇八〇	三〇八一
三〇七八	三〇七九	三〇八〇	三〇八一	三〇八二	三〇八三	三〇八四	三〇八五
三〇八二	三〇八三	三〇八四	三〇八五	三〇八六	三〇八七	三〇八八	三〇八九
三〇八六	三〇八七	三〇八八	三〇八九	三〇九〇	三〇九一	三〇九二	三〇九三
三〇九〇	三〇九一	三〇九二	三〇九三	三〇九四	三〇九五	三〇九六	三〇九七
三〇九四	三〇九五	三〇九六	三〇九七	三〇九八	三〇九九	三〇一〇〇	三〇一〇一
三〇九八	三〇九九	三〇一〇〇	三〇一〇一	三〇一〇二	三〇一〇三	三〇一〇四	三〇一〇五
三〇一〇二	三〇一〇三	三〇一〇四	三〇一〇五	三〇一〇六	三〇一〇七	三〇一〇八	三〇一〇九
三〇一〇六	三〇一〇七	三〇一〇八	三〇一〇九	三〇一〇一〇	三〇一〇一一	三〇一〇一二	三〇一〇一三
三〇一〇一〇	三〇一〇一一	三〇一〇一二	三〇一〇一三	三〇一〇一四	三〇一〇一五	三〇一〇一六	三〇一〇一七
三〇一〇一四	三〇一〇一五	三〇一〇一六	三〇一〇一七	三〇一〇一八	三〇一〇一九	三〇一〇二〇	三〇一〇二一
三〇一〇一八	三〇一〇一九	三〇一〇二〇	三〇一〇二一	三〇一〇二二	三〇一〇二三	三〇一〇二四	三〇一〇二五
三〇一〇二二	三〇一〇二三	三〇一〇二四	三〇一〇二五	三〇一〇二六	三〇一〇二七	三〇一〇二八	三〇一〇二九
三〇一〇二六	三〇一〇二七	三〇一〇二八	三〇一〇二九	三〇一〇三〇	三〇一〇三一	三〇一〇三二	三〇一〇三三
三〇一〇三〇	三〇一〇三一	三〇一〇三二	三〇一〇三三	三〇一〇三四	三〇一〇三五	三〇一〇三六	三〇一〇三七
三〇一〇三四	三〇一〇三五	三〇一〇三六	三〇一〇三七	三〇一〇三八	三〇一〇三九	三〇一〇四〇	三〇一〇四一
三〇一〇三八	三〇一〇三九	三〇一〇四〇	三〇一〇四一	三〇一〇四二	三〇一〇四三	三〇一〇四四	三〇一〇四五
三〇一〇四二	三〇一〇四三	三〇一〇四四	三〇一〇四五	三〇一〇四六	三〇一〇四七	三〇一〇四八	三〇一〇四九
三〇一〇四六	三〇一〇四七	三〇一〇四八	三〇一〇四九	三〇一〇五〇	三〇一〇五一	三〇一〇五二	三〇一〇五三
三〇一〇五〇	三〇一〇五一	三〇一〇五二	三〇一〇五三	三〇一〇五四	三〇一〇五五	三〇一〇五六	三〇一〇五七
三〇一〇五四	三〇一〇五五	三〇一〇五六	三〇一〇五七	三〇一〇五八	三〇一〇五九	三〇一〇六〇	三〇一〇六一
三〇一〇五八	三〇一〇五九	三〇一〇六〇	三〇一〇六一	三〇一〇六二	三〇一〇六三	三〇一〇六四	三〇一〇六五
三〇一〇六二	三〇一〇六三	三〇一〇六四	三〇一〇六五	三〇一〇六六	三〇一〇六七	三〇一〇六八	三〇一〇六九
三〇一〇六六	三〇一〇六七	三〇一〇六八	三〇一〇六九	三〇一〇七〇	三〇一〇七一	三〇一〇七二	三〇一〇七三
三〇一〇七〇	三〇一〇七一	三〇一〇七二	三〇一〇七三	三〇一〇七四	三〇一〇七五	三〇一〇七六	三〇一〇七七
三〇一〇七四	三〇一〇七五	三〇一〇七六	三〇一〇七七	三〇一〇七八	三〇一〇七九	三〇一〇八〇	三〇一〇八一
三〇一〇七八	三〇一〇七九	三〇一〇八〇	三〇一〇八一	三〇一〇八二	三〇一〇八三	三〇一〇八四	三〇一〇八五
三〇一〇八二	三〇一〇八三	三〇一〇八四	三〇一〇八五	三〇一〇八六	三〇一〇八七	三〇一〇八八	三〇一〇八九
三〇一〇八六	三〇一〇八七	三〇一〇八八	三〇一〇八九	三〇一〇九〇	三〇一〇九一	三〇一〇九二	三〇一〇九三
三〇一〇九〇	三〇一〇九一	三〇一〇九二	三〇一〇九三	三〇一〇九四	三〇一〇九五	三〇一〇九六	三〇一〇九七
三〇一〇九四	三〇一〇九五	三〇一〇九六	三〇一〇九七	三〇一〇九八	三〇一〇九九	三〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一
三〇一〇九八	三〇一〇九九	三〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一	三〇一〇一〇二	三〇一〇一〇三	三〇一〇一〇四	三〇一〇一〇五
三〇一〇一〇二	三〇一〇一〇三	三〇一〇一〇四	三〇一〇一〇五	三〇一〇一〇六	三〇一〇一〇七	三〇一〇一〇八	三〇一〇一〇九
三〇一〇一〇六	三〇一〇一〇七	三〇一〇一〇八	三〇一〇一〇九	三〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一二	三〇一〇一〇一三
三〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一二	三〇一〇一〇一三	三〇一〇一〇一四	三〇一〇一〇一五	三〇一〇一〇一六	三〇一〇一〇一七
三〇一〇一〇一四	三〇一〇一〇一五	三〇一〇一〇一六	三〇一〇一〇一七	三〇一〇一〇一八	三〇一〇一〇一九	三〇一〇一〇二〇	三〇一〇一〇二一
三〇一〇一〇一八	三〇一〇一〇一九	三〇一〇一〇二〇	三〇一〇一〇二一	三〇一〇一〇二二	三〇一〇一〇二三	三〇一〇一〇二四	三〇一〇一〇二五
三〇一〇一〇二二	三〇一〇一〇二三	三〇一〇一〇二四	三〇一〇一〇二五	三〇一〇一〇二六	三〇一〇一〇二七	三〇一〇一〇二八	三〇一〇一〇二九
三〇一〇一〇二六	三〇一〇一〇二七	三〇一〇一〇二八	三〇一〇一〇二九	三〇一〇一〇三〇	三〇一〇一〇三一	三〇一〇一〇三二	三〇一〇一〇三三
三〇一〇一〇三〇	三〇一〇一〇三一	三〇一〇一〇三二	三〇一〇一〇三三	三〇一〇一〇三四	三〇一〇一〇三五	三〇一〇一〇三六	三〇一〇一〇三七
三〇一〇一〇三四	三〇一〇一〇三五	三〇一〇一〇三六	三〇一〇一〇三七	三〇一〇一〇三八	三〇一〇一〇三九	三〇一〇一〇四〇	三〇一〇一〇四一
三〇一〇一〇三八	三〇一〇一〇三九	三〇一〇一〇四〇	三〇一〇一〇四一	三〇一〇一〇四二	三〇一〇一〇四三	三〇一〇一〇四四	三〇一〇一〇四五
三〇一〇一〇四二	三〇一〇一〇四三	三〇一〇一〇四四	三〇一〇一〇四五	三〇一〇一〇四六	三〇一〇一〇四七	三〇一〇一〇四八	三〇一〇一〇四九
三〇一〇一〇四六	三〇一〇一〇四七	三〇一〇一〇四八	三〇一〇一〇四九	三〇一〇一〇五〇	三〇一〇一〇五一	三〇一〇一〇五二	三〇一〇一〇五三
三〇一〇一〇五〇	三〇一〇一〇五一	三〇一〇一〇五二	三〇一〇一〇五三	三〇一〇一〇五四	三〇一〇一〇五五	三〇一〇一〇五六	三〇一〇一〇五七
三〇一〇一〇五四	三〇一〇一〇五五	三〇一〇一〇五六	三〇一〇一〇五七	三〇一〇一〇五八	三〇一〇一〇五九	三〇一〇一〇六〇	三〇一〇一〇六一
三〇一〇一〇五八	三〇一〇一〇五九	三〇一〇一〇六〇	三〇一〇一〇六一	三〇一〇一〇六二	三〇一〇一〇六三	三〇一〇一〇六四	三〇一〇一〇六五
三〇一〇一〇六二	三〇一〇一〇六三	三〇一〇一〇六四	三〇一〇一〇六五	三〇一〇一〇六六	三〇一〇一〇六七	三〇一〇一〇六八	三〇一〇一〇六九
三〇一〇一〇六六	三〇一〇一〇六七	三〇一〇一〇六八	三〇一〇一〇六九	三〇一〇一〇七〇	三〇一〇一〇七一	三〇一〇一〇七二	三〇一〇一〇七三
三〇一〇一〇七〇	三〇一〇一〇七一	三〇一〇一〇七二	三〇一〇一〇七三	三〇一〇一〇七四	三〇一〇一〇七五	三〇一〇一〇七六	三〇一〇一〇七七
三〇一〇一〇七四	三〇一〇一〇七五	三〇一〇一〇七六	三〇一〇一〇七七	三〇一〇一〇七八	三〇一〇一〇七九	三〇一〇一〇八〇	三〇一〇一〇八一
三〇一〇一〇七八	三〇一〇一〇七九	三〇一〇一〇八〇	三〇一〇一〇八一	三〇一〇一〇八二	三〇一〇一〇八三	三〇一〇一〇八四	三〇一〇一〇八五
三〇一〇一〇八二	三〇一〇一〇八三	三〇一〇一〇八四	三〇一〇一〇八五	三〇一〇一〇八六	三〇一〇一〇八七	三〇一〇一〇八八	三〇一〇一〇八九
三〇一〇一〇八六	三〇一〇一〇八七	三〇一〇一〇八八	三〇一〇一〇八九	三〇一〇一〇九〇	三〇一〇一〇九一	三〇一〇一〇九二	三〇一〇一〇九三
三〇一〇一〇九〇	三〇一〇一〇九一	三〇一〇一〇九二	三〇一〇一〇九三	三〇一〇一〇九四	三〇一〇一〇九五	三〇一〇一〇九六	三〇一〇一〇九七
三〇一〇一〇九四	三〇一〇一〇九五	三〇一〇一〇九六	三〇一〇一〇九七	三〇一〇一〇九八	三〇一〇一〇九九	三〇一〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一〇一
三〇一〇一〇九八	三〇一〇一〇九九	三〇一〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一〇一	三〇一〇一〇一〇二	三〇一〇一〇一〇三	三〇一〇一〇一〇四	三〇一〇一〇一〇五
三〇一〇一〇一〇二	三〇一〇一〇一〇三	三〇一〇一〇一〇四	三〇一〇一〇一〇五	三〇一〇一〇一〇六	三〇一〇一〇一〇七	三〇一〇一〇一〇八	三〇一〇一〇一〇九
三〇一〇一〇一〇六	三〇一〇一〇一〇七	三〇一〇一〇一〇八	三〇一〇一〇一〇九	三〇一〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一〇一二	三〇一〇一〇一〇一三
三〇一〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一〇一二	三〇一〇一〇一〇一三	三〇一〇一〇一〇一四	三〇一〇一〇一〇一五	三〇一〇一〇一〇一六	三〇一〇一〇一〇一七
三〇一〇一〇一〇一四	三〇一〇一〇一〇一五	三〇一〇一〇一〇一六	三〇一〇一〇一〇一七	三〇一〇一〇一〇一八	三〇一〇一〇一〇一九	三〇一〇一〇一〇二〇	三〇一〇一〇一〇二一
三〇一〇一〇一〇一八	三〇一〇一〇一〇一九	三〇一〇一〇一〇二〇	三〇一〇一〇一〇二一	三〇一〇一〇一〇二二	三〇一〇一〇一〇二三	三〇一〇一〇一〇二四	三〇一〇一〇一〇二五
三〇一〇一〇一〇二二	三〇一〇一〇一〇二三	三〇一〇一〇一〇二四	三〇一〇一〇一〇二五	三〇一〇一〇一〇二六	三〇一〇一〇一〇二七	三〇一〇一〇一〇二八	三〇一〇一〇一〇二九
三〇一〇一〇一〇二六	三〇一〇一〇一〇二七	三〇一〇一〇一〇二八	三〇一〇一〇一〇二九	三〇一〇一〇一〇三〇	三〇一〇一〇一〇三一	三〇一〇一〇一〇三二	三〇一〇一〇一〇三三
三〇一〇一〇一〇三〇	三〇一〇一〇一〇三一	三〇一〇一〇一〇三二	三〇一〇一〇一〇三三	三〇一〇一〇一〇三四	三〇一〇一〇一〇三五	三〇一〇一〇一〇三六	三〇一〇一〇一〇三七
三〇一〇一〇一〇三四	三〇一〇一〇一〇三五	三〇一〇一〇一〇三六	三〇一〇一〇一〇三七	三〇一〇一〇一〇三八	三〇一〇一〇一〇三九	三〇一〇一〇一〇四〇	三〇一〇一〇一〇四一
三〇一〇一〇一〇三八	三〇一〇一〇一〇三九	三〇一〇一〇一〇四〇	三〇一〇一〇一〇四一	三〇一〇一〇一〇四二	三〇一〇一〇一〇四三	三〇一〇一〇一〇四四	三〇一〇一〇一〇四五
三〇一〇一〇一〇四二	三〇一〇一〇一〇四三	三〇一〇一〇一〇四四	三〇一〇一〇一〇四五	三〇一〇一〇一〇四六	三〇一〇一〇一〇四七	三〇一〇一〇一〇四八	三〇一〇一〇一〇四九
三〇一〇一〇一〇四六	三〇一〇一〇一〇四七	三〇一〇一〇一〇四八	三〇一〇一〇一〇四九	三〇一〇一〇一〇五〇	三〇一〇一〇一〇五一	三〇一〇一〇一〇五二	三〇一〇一〇一〇五三
三〇一〇一〇一〇五〇	三〇一〇一〇一〇五一	三〇一〇一〇一〇五二	三〇一〇一〇一〇五三	三〇一〇一〇一〇五四	三〇一〇一〇一〇五五	三〇一〇一〇一〇五六	三〇一〇一〇一〇五七
三〇一〇一〇一〇五四	三〇一〇一〇一〇五五	三〇一〇一〇一〇五六	三〇一〇一〇一〇五七	三〇一〇一〇一〇五八	三〇一〇一〇一〇五九	三〇一〇一〇一〇六〇	三〇一〇一〇一〇六一
三〇一〇一〇一〇五八	三〇一〇一〇一〇五九	三〇一〇一〇一〇六〇	三〇一〇一〇一〇六一	三〇一〇一〇一〇六二	三〇一〇一〇一〇六三	三〇一〇一〇一〇六四	三〇一〇一〇一〇六五
三〇一〇一〇一〇六二	三〇一〇一〇一〇六三	三〇一〇一〇一〇六四	三〇一〇一〇一〇六五	三〇一〇一〇一〇六六	三〇一〇一〇一〇六七	三〇一〇一〇一〇六八	三〇一〇一〇一〇六九
三〇一〇一〇一〇六六	三〇一〇一〇一〇六七	三〇一〇一〇一〇六八	三〇一〇一〇一〇六九	三〇一〇一〇一〇七〇	三〇一〇一〇一〇七一	三〇一〇一〇一〇七二	三〇一〇一〇一〇七三
三〇一〇一〇一〇七〇	三〇一〇一〇一〇七一	三〇一〇一〇一〇七二	三〇一〇一〇一〇七三	三〇一〇一〇一〇七四	三〇一〇一〇一〇七五	三〇一〇一〇一〇七六	三〇一〇一〇一〇七七
三〇一〇一〇一〇七四	三〇一〇一〇一〇七五	三〇一〇一〇一〇七六	三〇一〇一〇一〇七七	三〇一〇一〇一〇七八	三〇一〇一〇一〇七九	三〇一〇一〇一〇八〇	三〇一〇一〇一〇八一
三〇一〇一〇一〇七八	三〇一〇一〇一〇七九	三〇一〇一〇一〇八〇	三〇一〇一〇一〇八一	三〇一〇一〇一〇八二	三〇一〇一〇一〇八三	三〇一〇一〇一〇八四	三〇一〇一〇一〇八五
三〇一〇一〇一〇八二	三〇一〇一〇一〇八三	三〇一〇一〇一〇八四	三〇一〇一〇一〇八五	三〇一〇一〇一〇八六	三〇一〇一〇一〇八七	三〇一〇一〇一〇八八	三〇一〇一〇一〇八九
三〇一〇一〇一〇八六	三〇一〇一〇一〇八七	三〇一〇一〇一〇八八	三〇一〇一〇一〇八九	三〇一〇一〇一〇九〇	三〇一〇一〇一〇九一	三〇一〇一〇一〇九二	三〇一〇一〇一〇九三
三〇一〇一〇一〇九〇	三〇一〇一〇一〇九一	三〇一〇一〇一〇九二	三〇一〇一〇一〇九三	三〇一〇一〇一〇九四	三〇一〇一〇一〇九五	三〇一〇一〇一〇九六	三〇一〇一〇一〇九七
三〇一〇一〇一〇九四	三〇一〇一〇一〇九五	三〇一〇一〇一〇九六	三〇一〇一〇一〇九七	三〇一〇一〇一〇九八	三〇一〇一〇一〇九九	三〇一〇一〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一〇一〇一
三〇一〇一〇一〇九八	三〇一〇一〇一〇九九	三〇一〇一〇一〇一〇〇	三〇一〇一〇一〇一〇一	三〇一〇一〇一〇一〇二	三〇一〇一〇一〇一〇三	三〇一〇一〇一〇一〇四	三〇一〇一〇一〇一〇五
三〇一〇一〇一〇一〇二	三〇一〇一〇一〇一〇三	三〇一〇一〇一〇一〇四	三〇一〇一〇一〇一〇五	三〇一〇一〇一〇一〇六	三〇一〇一〇一〇一〇七	三〇一〇一〇一〇一〇八	三〇一〇一〇一〇一〇九
三〇一〇一〇一〇一〇六	三〇一〇一〇一〇一〇七	三〇一〇一〇一〇一〇八	三〇一〇一〇一〇一〇九	三〇一〇一〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一〇一〇一二	三〇一〇一〇一〇一〇一三
三〇一〇一〇一〇一〇一〇	三〇一〇一〇一〇一〇一一	三〇一〇一〇一〇一〇一二					

云元
云四一
云四二
云四三
云四四
云四五
云四六
云四七
云四八

坂本鉦祥東京
矢内口誠也福島
高橋一雄東京
大間知徹子富山
鈴木昭吉男和
鈴木吉浦
昭和鹽田岳會代表
廣瀨守光東京
吉谷明修

訂正 前號、新入會員の部で、「三三〇九井上亮平」とあるのは「二三〇八」の誤りにつきこことに訂正します。(以下次號)

乗鞍輜行の記

一四六號で發表の天國バス登山は、豫定通り、飛驒の都高山の座談會を振出しに開始された。

遠く伊勢や秩父からも參加、八月廿七日朝まだき、えんえん十餘里を鶴ガ池畔へ……忽ち現われ忽ち消える雄峯、濃飛信越の山又山一行十五名老も幼もない嘆聲のみ岡本・平田兩氏の大便秘帶をエンジンの響きをあとに大便粘帶をぬけりと、忽ち捲き起る濃霧と烈風、子供が倒される小石が飛ぶ、三千米の儼たる頂上だ。

肩で休み、冷泉で慰う頃、深緑の蔭に重い眞夏が漲つてた。俯瞰する一めんのそば畑の片隅、木かげに鈴蘭小屋を見出した。

明ければ雨もよい、三々伍々番所原を過ぎ、大野川で雨宿りしてから梓川へ。

バスと電車で湯の町淺間へ、一浴晚餐を共にすると、老若男女の顔から、ついさき前川渡まで、一行をとざした疲れの雲も拭い去られた。(武内猛馬記)

この行、絶大なお世話になりました飛驒山岳會平田會長外會員各位に厚く御禮申上げます。

山の寫眞とカメラの店

貴方の傑作は.....

高級 D.P. 山映商會で完成!!

8.16. ミリ映画製作 カメラ部品製作修理

有限會社 山映商會 風見武秀
東京都中央區銀座西 4 の 1 TEL 京橋 (56) 3073

日本山岳會編
山日記

第 15 輯 1950 年版
A6、350 頁、價 200 円 (會員 180 円)
發行所 東京都千代田區神田駿河台 2-1 茗溪堂書店

山行に日常に
岳人必携の寶典
山日記

ぜひお求め下さい

そして常にポケットに、机上に

[illegible]

◎内容大改訂につぐ大増補（目次右に）
紙質、外装、製本大改良

◎豫約の場合送料共一八〇円 至急本會宛宛
約を 會員外も團體などで一〇部まとまれ
ば一部贈呈 乞御期待 十一月下旬發行

